

# Eureka XI

六年制通信 No.10 令和5年6月16日(金)号

## 虚学

我が愛用の『新明解国語辞典(第三版)』には載っていないのですね、「虚学」って。知らなかった。「実学」はもちろん載っています。福沢諭吉が使って以来有名になったわけですから、そりゃ載りますわな。「虚学」は「実学」の反対語ですが、まだ認知されていないのでしょうかね。『新明解…』で「実学」を引くと、「習った知識が直接、社会生活に役立つ学問。〔狭義では、医学や商学・工学などを指す〕」と書いてあります。なるほど、ということは「虚学」とは「習った知識が直接社会生活に役立たない学問」ということでしょうか、例えば何でしょうね。皆さんは何だと思いませんか。私は一番に「文学」が浮かびました。一般企業に就職するときに、大学で勉強した「文学」はおそらく全く役に立たない、そう考えると宇宙物理学なんかも当てはまりますかね。銀行や証券会社に就職するのに必要ない知識ですからね。ノーベル賞に輝くニュートリノの小柴博士もご自分の研究を何の役にも立たないと言っておられたように思います。面白いですね。先日の芸術鑑賞会でも言いましたが、学問の世界にも不要不急の分野があるということですね。しかし、不要不急の中にこそ私たちの文化が息づいているということ、それは芸術の世界だけでなく学問の世界もまた同じことだと私は思います。しかし、1991年の大学設置基準の大綱化以来、大学の単位認定科目の編成が各大学の裁量に任されるようになると、いわゆる教養教育に類する科目、例えば第二外国語でさえ崩壊していきました。必要か必要でないか、学生が取りたがるか取りたがらないかという指標が大学側の科目設定に影響を与えるようになったわけです。大学の入試問題にしても高校生が勉強したがる科目を課さないようになりました。古文・漢文などはその最たる例で、二次試験でこれらを課している大学は今何校あるのでしょうか。こういう考え方、と言いますか時代と言いますか、間違っていると思います。実利に結びつかない学問を軽視する、そんな風潮は西洋にもあります。昔はラテン語が必修だった学校でも今ではそのような修得に苦しむ古典語は排斥されています。日本でも産官学共同が声高に叫ばれるようになって、学生は学問の府というよりも就職予備校として大学を考えるようになりましたね。それが証拠に三回生から就職活動をするようになったのではないですか。最高学府の矜持が失われてはいませんか。

不要不急とか、役に立つか立たないとか、それは結局経済の概念ですよね。以前にも書きましたが、経済の概念は、一言で言えば「時は金なり」ということです。この **Time is money.** は、フランクリンが初めて言った言葉ですが、ということは、アメリカ建国の時代になって初めて人類は、時間をお金に換算することを覚えたわけです。 **Time is**

money. とは徹底的に無駄をなくすという発想です。時間という、連綿と続いている、しかし刻々と失われていくものに対し、「無駄な時間」と「有効な時間」の区別を与えたということです。時間を二種類に分けるということです。さて、しかし、これが本当に人間にとって幸せなことなのかどうか。私は大いに疑わしく思います。

HP に載せた言葉をもう一度書いてみます。『莊子』(雜篇「外物篇」)からの引用です。

「大地は果てしなく広大だが、人が利用するのは足を置くわずかな部分にすぎない。

けれども、足の寸法に合わせて不要な土地を削り、地の底に至るまで掘り下げていったら、人はそのちっぽけな土地にやはり悠然と立っていられるのだろうか」

人が安心して立っていられるには、実際には使わない広い土地が必要です。その土地を無駄だと切り捨ててよいのかどうか。無用なものを切り捨てていく教育、最短距離を効率よく歩もうとする生徒、そういう道を教えようとする教師、しかしそれは、生徒たちの足を置く大地の周りを削り取っていることにはならないのでしょうか。昔ある教育機関の校長は、生徒は「大きな未完成品」として卒業するべきだと言いました。その「大きな」とは、足の周りに広がる土地の大きさを表している言葉のように私には思えます。私たち教師も、生徒諸君も、自分たちの立つ大地を広く豊かなものにすることを忘れてはならないと思います。今の君たちにとって無用なものなどない、そう断言していいと思います。学校には一見すると無用に思うことがたくさんあるはずですが、でも、きっと、それらが君の大地を広げてくれます。私はそう信じています。

#### 今週のおすすめ

・西村京太郎 『十津川警部捜査行 怪しい証言』 (双葉文庫)

実はこれ、先にドラマを観たのです。渡瀬恒彦さん主演の。小田原城の観光ボランティアをしている泉ピン子さん演じる 71 歳の女性は、今日もボケ防止のためにせつせと女性四人連れの観光客を案内している。気がつくとも一人が消え三人になっている。しかし、皆初めから三人だったと言い張り、おばあさんボケてるんじゃないのと笑う。翌日なくなった女性がまた小田原城を訪ねてくる。お茶を飲みながら昨日は御免なさいと、他の人たちもあなたをからかっただけだからと。しかしその女性が遺体で見つかり、お茶を飲みながらボランティアのおばあさんと話をしたのが本当のその女性なのか、捜査の決め手となってしまふ。最初は絶対に間違いないと言い張るおばあさんの証言が次第に怪しくなってくる。ドラマはこういう流れで進みます。面白かったので原作を読もうと思ったのですが、読んでびっくり。原作とドラマの脚本はこんなに違うんだ。こんなに変えていいんだと思ったわけ。小田原城に来るのは原作では男女五人、ドラマでは女性四人。被害者の職業も原作は銀行員、ドラマは看護師。殺人の動機も全く違うし。最後、おばあさんの認知症テストのようなものが問題になるのが原作。ドラマはむしろおばあさんのすぐれた記憶力のおかげで事件は解決。う～む。原作 vs 脚本、いろいろ考えさせられました。あ、これ、楽しむためには君たちもドラマを観なくてはいけませんね。再放送に期待してください。

BGM は B'z の 今夜月の見える丘に でした…。